「見えないものに目を注ぐ」

2021年8月

中学教頭　慎 繁範

それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」 トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」　（ヨハネによる福音書 20章 27～29節）

キリスト教信仰は、復活した主イエスを信じます。イエスは十字架に架けられる前、ご自身の弟子たちに自分は死んで3日目によみがえると予言していました。それなのに、どの福音書にも主イエスの復活を信じられなかった弟子たちのことが記されています。上掲のヨハネによる福音書も同様で、トマスは十二弟子の1人でありながら、復活の主イエスを信じることができませんでした。25節に「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」とあります。それゆえトマスは弟子の中でも、疑い深いトマスと揶揄されています。

人間の五感（視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚）のうち、視覚は最も大きな影響を我々に与えています。『百聞は一見に如かず』といいますが、人間が外界から受け取る情報のうち、8割が視覚によるものであると言われています。それゆえに、見えるものこそが重要と考えるのも当然と言えるのではないでしょうか。昨今、スマートフォンやSNSが普及し、いつでもどこでも他人の撮った風景や食べ物などの映像が見られるようになりました。インスタ映えに代表されるように、見た目重視の傾向は加速しているように思えます。『人は見た目が9割』という本も流行しました。他人からよく見られたいという欲求は常に私たちの中に存在していると思います。

実は、ものが見える仕組みはこうなっています。そこにりんごがあると見るためには、まず光がなくてはいけません。太陽や蛍光灯、LEDといった光源から出た光がりんごにあたって反射し、私たちの目に入り、網膜上の視神経を刺激して脳に送られ、りんごと認識されるわけです。スマートフォン上に画像が表示されるのは、スマートフォンのディスプレイ上に無数の光源があって、そこから出た光を見ているのです。光源がなければ見えませんし、脳内で画像を認識する作業が加わるので、本来の姿とは違う認識をされることもよくあります。実は、視覚はとてもいい加減なものなのです。

物事の本質、本当に大事なことは、実は見えないものの中にあることが多いのではないでしょうか。『わたしたちは見えるものにではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです』（コリントの信徒への手紙Ⅱ4章18節）　わたしたちも、容姿とかSNS映えといった、見えるものを追求するのではなく、見えないものに価値を置いて生きていく人になりましょう。『見えないものに目を注ぐ』という表現は矛盾しているようですが、見えないものを信じると換言できます。そして、見えないものを信じるときに、それが見えるようになってくるのです。そもそも信仰とはそのようなものなのです。

『信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです』（ヘブライ人への手紙11章1～3節）